

# 平成24年 北栄町議会議員研修報告書

H24年 8月10日 津川俊仁

## (1) 障がい者雇用の促進について

カルビー・イートーク㈱

カルビー・イートーク㈱は、障がいのある人が働く場を提供していて、けして、ボランティアだけの就労施設ではないとの説明を受けて、企業(雇用者)と従業員(障がいのある人)の関係がなれあいだけではないとの印象を受けた。賃金も、最低賃金が保証されているとのこと。

ここでの作業は、カルビー製品を、お土産用(通常の包装形態とは違う)に出荷するために、計量包装、ケース詰め作業などが主で、流れ作業的に行われている。

月1回、作業標準どおりの手順で仕事ができているかなど「スキル評価」もされ、それぞれ個人の能力に合ったランクを設定し、達成することを目標にしている。また、業務日誌による評価など、達成したり、褒められる喜びが、「明日も頑張る」という気を起こしているということであった。雇用者は、生き生き職場で働いていたイメージであった。

「就労するためにつけておくべき力」について

1. 心と身体の健康管理
2. 日常生活・基本的な生活リズム
3. 社会生活能力・対人技能(挨拶・返事が大事)
4. 基本的労働習慣(朝定時に出勤できること)
5. 職業適性

の5つのポイントとのこと。これは、湖南省が推進する、発達支援システムにも通じるものがあり、興味深いものであった。

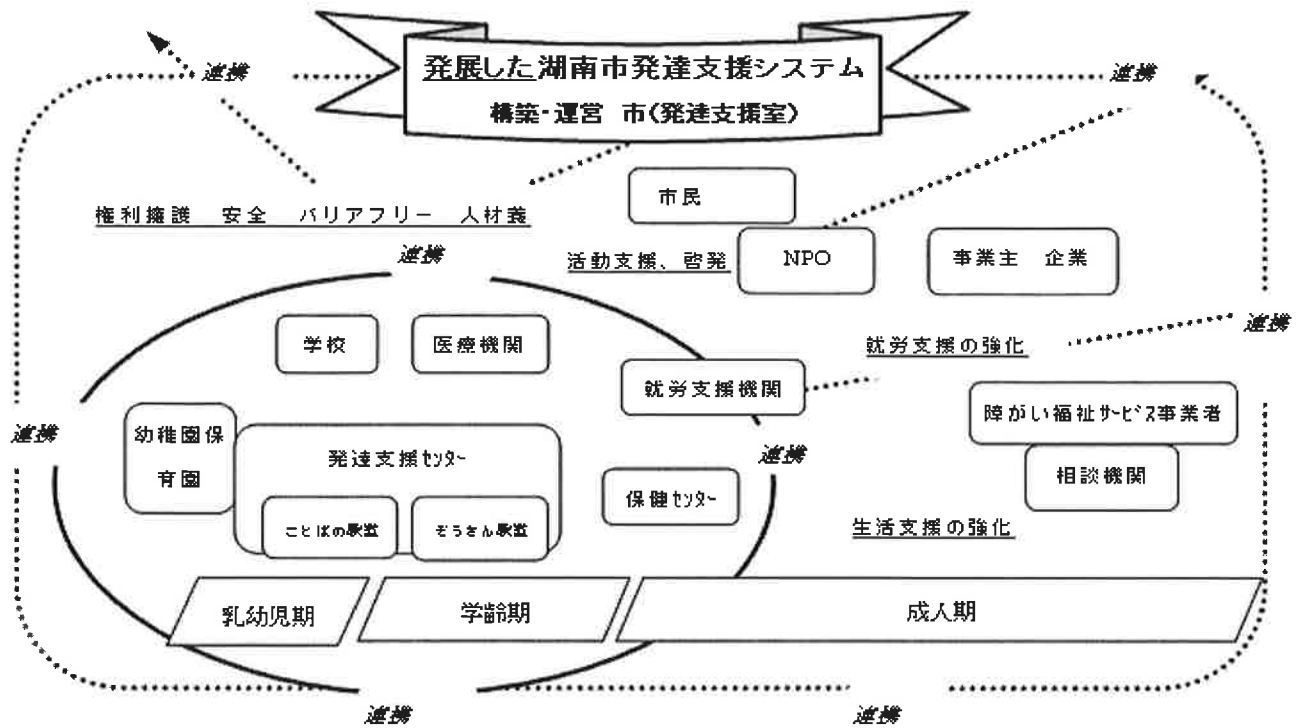
## (2) 発達支援システムについて

湖南省健康福祉部 社会福祉課

湖南省は東証一部上場企業も多く、障がい者の方の雇用もある程度期待できる環境にあることがまずスタート。

湖南省発達支援システムとは、平成14年から取り組んでいる。支援の必要な人に対し、乳幼児期から学齢期、就労期までの縦の連携と教育・福祉・保健・就労・医療の横の連携によって支援を提供する仕組み。

## ● 条例の効果(イメージ)



湖南省ホームページより

2時間に及ぶ、支援室の説明であったが、カルビー・イートーク(株)での視察の後だったこともあり、素直に受け入れができた。特に、湖南省は、対象となる障がい者の範囲を、身体障がい者、知的障がい者、精神障がい者に加えて発達障がい者に広げていて、幼児教育からの支援を始めていることが大きな特徴である。

組織の立ち上げの際に関わった人が、現在市議会議員として活動されていて、いい意味での後押しがされているとの言葉は、組織が機能するか否かは、最終的にはやはり人材であるとの思いを強くした。

### (3) グリーンツーリズムの取り組みについて 南信州観光公社 高橋充

南信州は中央・南両アルプスの間に天竜川が流れる巨大な谷間、伊那谷にあり、愛知県、岐阜県、静岡県と接した1市3町10村で構成される豊かな自然に囲まれた地域である。

平成8年に飯田市商工観光課観光係が中心となって「ほんもの体験」や「体験教育」をコンセプトとした観光事業を始めた。事業の広がりに伴い、平成13年には、飯田市及び周辺4村、地元企業・団体の出資による第3セクターとして「株式会社南信州観光公社」を設立している。

1995年から通過型の観光地から滞在型への転換を目指し、さらに教育旅行にターゲットを絞った取り組みがなされているとのこと。体験プログラムの受入地域も飯田市から下伊那郡全域に広がり、現在年間百十を超える学生団体を受け入れているとのこと。

代表取締役の高橋氏の説明であったが、元旅行会社の社員からの転職とのことで、様々なアイデアを出しながらの経営で、もう少しで黒字転換とのこと。受け入れ農家と旅行者、あるいは学校の修学旅行担当者との調整作業など、長年培ったノウハウがあるとのことだった。

コンセプトを持って継続することが必要との思いを強くした。

#### (4) メガソーラー施設見学

メガソーラーいいだ

施設見学のための視察であった。

無人であるため、防犯体制の整備が必要。防犯カメラが多数設置してあった。

通路部分など、メンテナンス用空間が必要であること。思った以上にパネルの接地面積が必要だと感じた。

除雪の体制確保 発電パネルの傾斜、地上からの高さの確保。

雇用は、周辺の草取り程度しか望めないのでは？パネルの清掃作業が雇用につながればとの思いがある。

本町のソーラー発電施設設置についての参考になった。

#### (4) まちづくりについて

(株)飯田まちづくりカンパニー



飯田エコハウス

飯田エコハウスにての説明であった。飯田市丘の上地区は、こじんまりとした城下町。りんご並木をまちづくりの中心におき、しっとりとした落ち着いた街並みを演出していた。

りんご並木

<http://www.city.iida.lg.jp/namiki/history/history50.html>

昭和 22 年に発生した飯田大火からの復興のシンボル「りんご並木」。

当時の中学生が自らの手で何か貢献したいとの思いを、形に表したのが、「りんご並木」生徒自らがりんごを植え、自らが管理し、当時 1600 人規模から現在は 240 人規模の中学校だが、木ごとに担当を決めて毎年変わらない管理をしているとのこと。生徒たち自らが描いた「自分たちの手で美しいまちをつくろう」という夢は、いつしか「まちづくりの精神」となって、まち全体に広がり、地域に受け継がれているとのこと。現在も、計画敷地内には、大火復興当時に建てられた木造の建物が数多く残しながら、下記マンションの建設がなされ、魅力的なまち、これらを飯田ならではの資源ととらえなおし、古いけれど新しい「レトロモダン」な空間を創出している。

(株)飯田まちづくりカンパニー

(株)飯田まちづくりカンパニーは、マンション建設・管理会社から始まり、現在は3棟のマンションの管理を中心に、活動している。上記エコハウスの運営も行なっているとのこと。

飯田市丘の上地区は、空洞化する街なかを、便利で、住む人に優しい防災も含めて快適なまちづくりのために、市街地の中心地にマンション建設することから始まったとのこと。街なか居住（中心市街地に住んでもらう）を推進する上で、

老朽化した小規模個人住宅をマンション建設という手段で対応したとのこと。仕方なく郊外へ転出せざるを得ない事例など、建設当時の苦勞をお聞き出来たのは有意義であった。

(6)まとめ

3日間天気にも恵まれ、無事研修が終了できた。視察受け入れ先及び事務局等すべてのお世話になった人たちに感謝したい。あわせて、今回の視察目的の一つである発達支援システムを、本町での取り組みについてさらなる検討をしていきたい。